

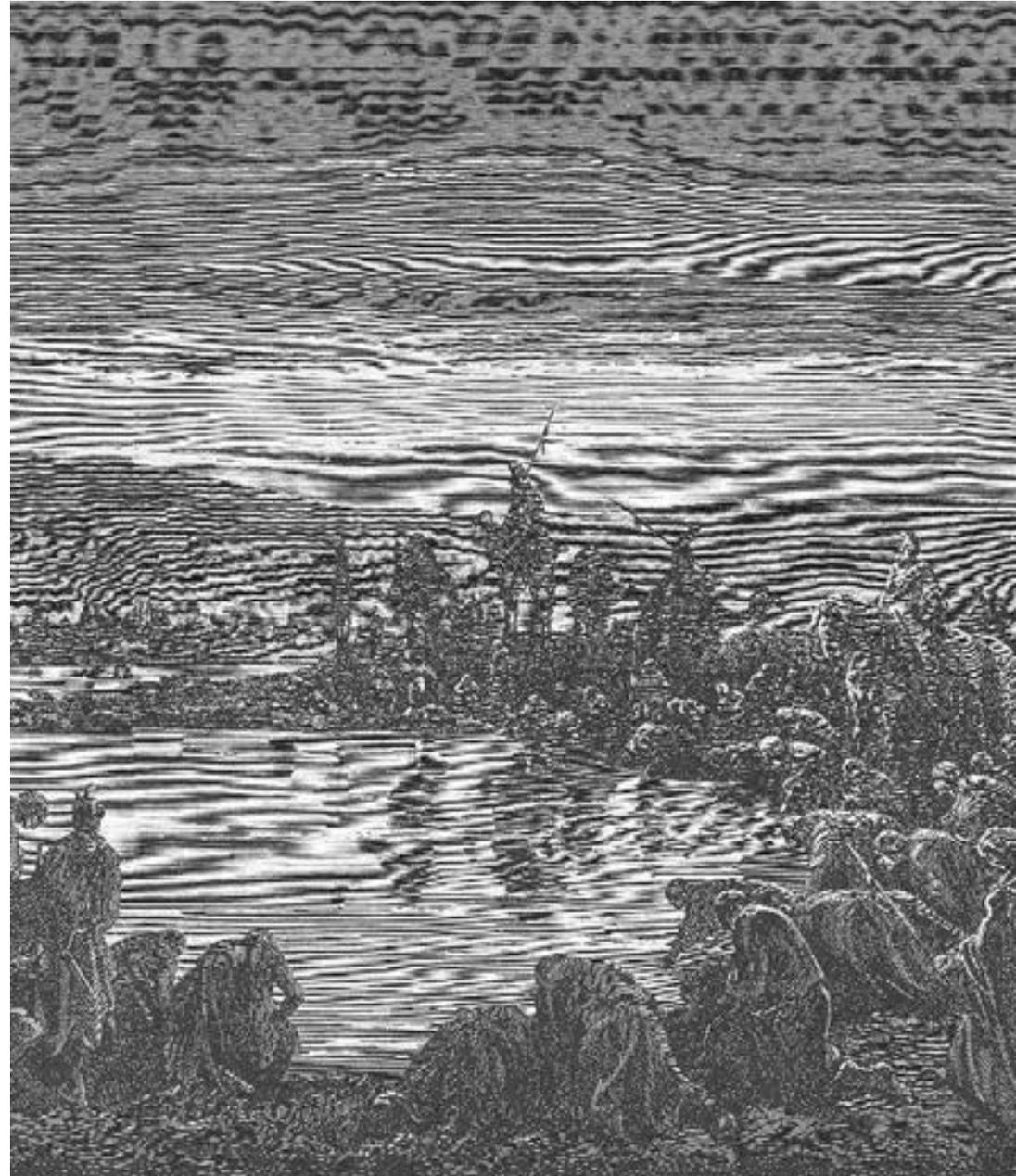
士師
聖徒伝 70

「臆病者が 勇者と なるとき」

士師記6～8章 士師ギデオンの戦い

【今日のアウトライン】

- 0. イントロダクション
- I. ギデオンの召命 **6章**
- II. ミディアン人との戦い **7章**
- III. 戦いの後に **8章**
- IV. まとめと適用
 - 臆病者の神の勇士
 - ギデオンに学ぶこと





【無垢の時代】

【良心の時代】

【人類統治の時代】

【約束の時代】

【律法の時代】

【恵みの時代】

【御国の時代】

天地創造

墮罪
~大洪水

バベルの
塔事件

アブラハム
~ヤコブ

イスラエル
王国時代
メシア初臨

聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨

千年王国
大審判
新天新地

①エデン契約

②アダム契約

③ノア契約

④アブラハム契約

⑤モーセ契約

⑥土地の契約

⑦ダビデ契約

⑧新しい契約

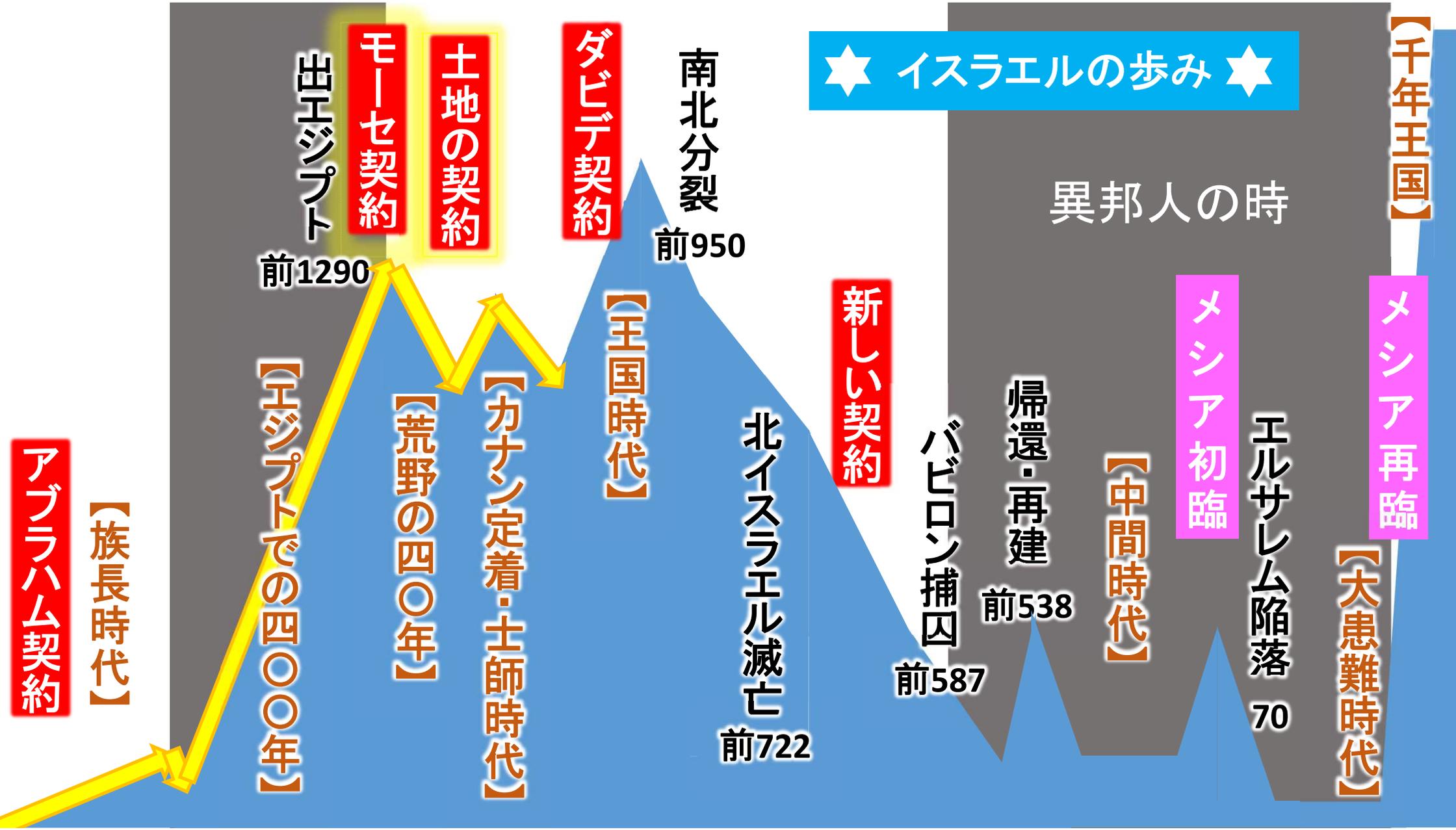
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!

過去

現在

未来

★ イスラエルの歩み ★



出エジプト
前1290

モーセ契約

土地の契約

ダビデ契約

南北分裂
前950

【王国時代】

新しい契約

バビロン捕囚
前587

帰還・再建
前538

【中間時代】

メシア初臨

エルサレム陥落
70

【大患難時代】

メシア再臨

【千年王国】

異邦人の時

アブラハム契約

【族長時代】

【エジプトでの四〇〇年】

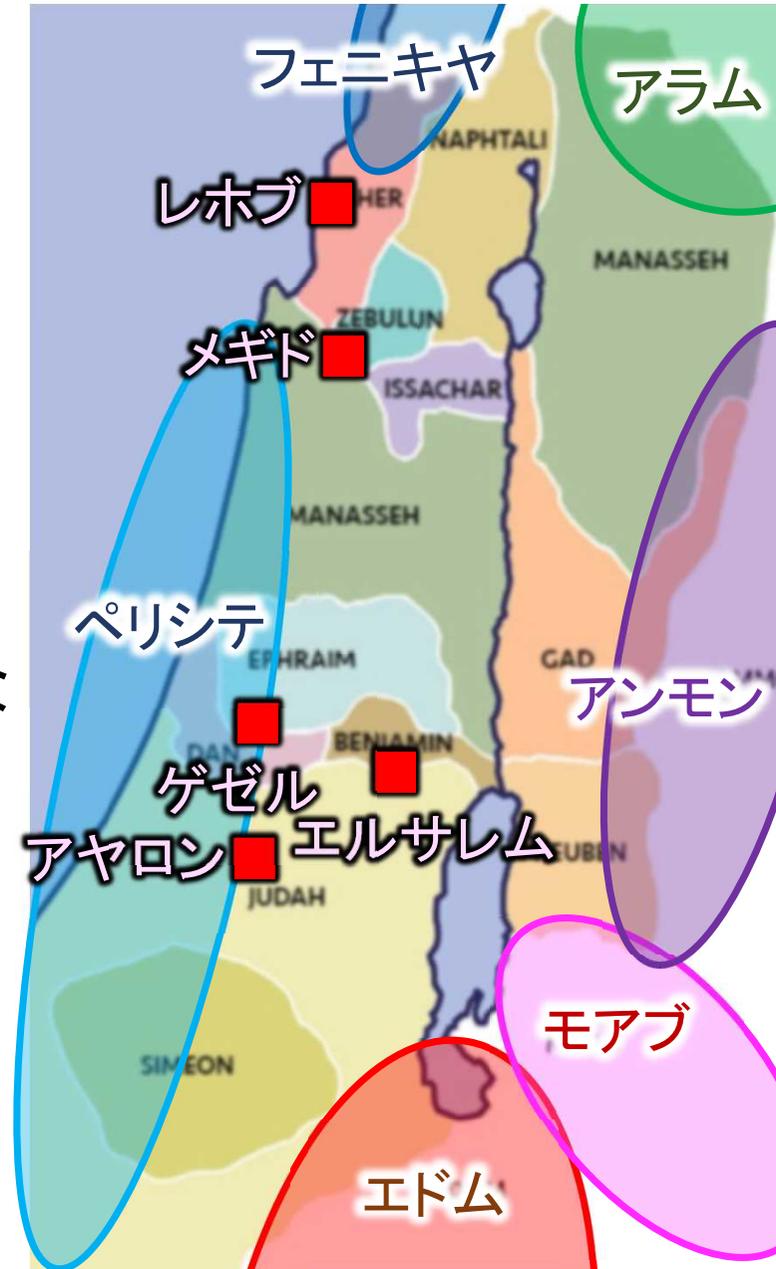
【荒野の四〇年】

【カナン定着・士師時代】

北イスラエル滅亡
前722

【残された土地】

- ヨシュアに率いられたイスラエルは、12部族それぞれの相続地を手に入れた。
- しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。
- カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な民族がいて、イスラエルを脅かしていた。



【士師・さばきつかさ・とは？】

- 神が立てた、イスラエルの一部族のリーダー。
士師という正式な地位があるわけではない。
裁判官。政治的、軍事的指導者。
民の解放者、救済者。➡いろいろな立場を兼任。

【士師記で繰り返されるイスラエルの罪】

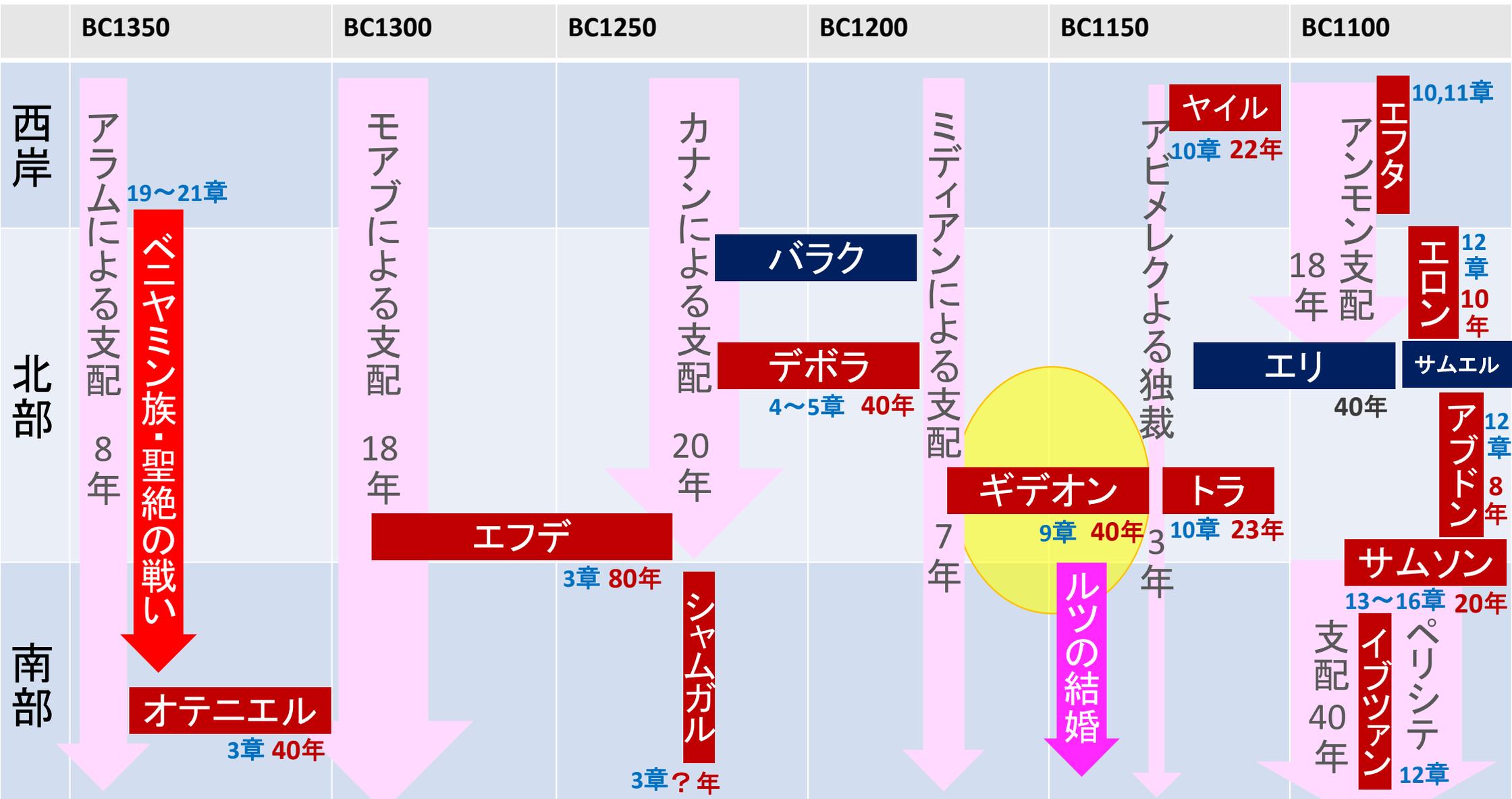
- ❶ 背信 ...カナンの偶像礼拝に取り込まれる
- ❷ 裁き ...主が異邦の民を用いてイスラエルを裁く。
- ❸ 悔い改め ...イスラエルは主に助けを求める。
- ❹ 士師による解放 ...主は、士師を送り敵を退ける。



士師	聖書	出身部族	敵
①オテニエル	3:7～11	ユダ	アラム人
②エフデ	3:12～30	ベニヤミン	モアブ人
③シャムガル	3:31	?	ペリシテ人
④デボラ	4:1～5:31	エフライム	カナン人
⑤ギデオン	6:1～8:32	マナセ	ミディアン人
⑥トラ	10:1～2	イッサカル	?
⑦ヤイル	10:3～5	マナセ(ギルアデ)	?
⑧エフタ	10:6～11:40	マナセ(ギルアデ)	アンモン人
⑨イプツァン	12:8～10	ユダ ベツレヘム	?
⑩エロン	12:11～12	ゼブルン	?
⑪アブドン	12:13～15	エフライム	?
⑫サムソン	13:1～16:31	ダン	ペリシテ人



【士師の時代】



I. ギデオンの召命

士師記6章

サムリアの山地



【イスラエル罪とミディアン人の侵略】 士師6:1～6
イスラエルの子らは、【主】の目に悪であることを行っ
た。そこで、【主】は七年の間、彼らをミディアン人の
手に渡された。

...イスラエル人はミディアン人を避けて、山々にある
洞窟や洞穴や要害を自分たちのものとした。

イスラエルが種を蒔くと、いつもミディアン人、アマレ
ク人、そして東方の人々が上って来て、彼らを襲った。

- ミディアン人は、アブラハムの子孫。砂漠の民。
ラクダに乗り、いなごの大軍のように襲い、
海辺のガザに至るまで、略奪の限りを尽くした。
- イスラエルは、主に叫び求めた。



【預言者の警告】 士師6:7～10

■ 主は預言者を遣わし、イスラエルの罪を告げた。「イスラエルの神、【主】はこう言われる。わたしはあなたがたをエジプトから上らせ、奴隷の家から導き出し、エジプト人の手と、圧迫するすべての者の手から助け出し、あなたがたの前から彼らを追い出して、その地をあなたがたに与えた。

わたしはあなたがたに言った。『わたしが【主】、あなたがたの神である。あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神々を恐れてはならない』と。ところが、あなたがたはわたしの声に聞き従わなかった。」

➡偶像礼拝が、イスラエルの最大の罪



【カナンの偶像礼拝とは？】

■カナンのメジャーな神々

- ★豊穣をもたらす神バアル。
- ★女神アナト(アシュタロテ、アシラ)。
- ★敵対する不作と不妊の神ムト。



- ムトが、バアルを殺し、不作になるが、バアルは、アナトと交わることで蘇り、再び豊穣をもたらす。
➡世界中の神話に共通の構造

- 収穫期には、神殿娼婦、男娼との性的儀式がおおっぴらに行われ、人々はこぞって参加した。



バアル神の像

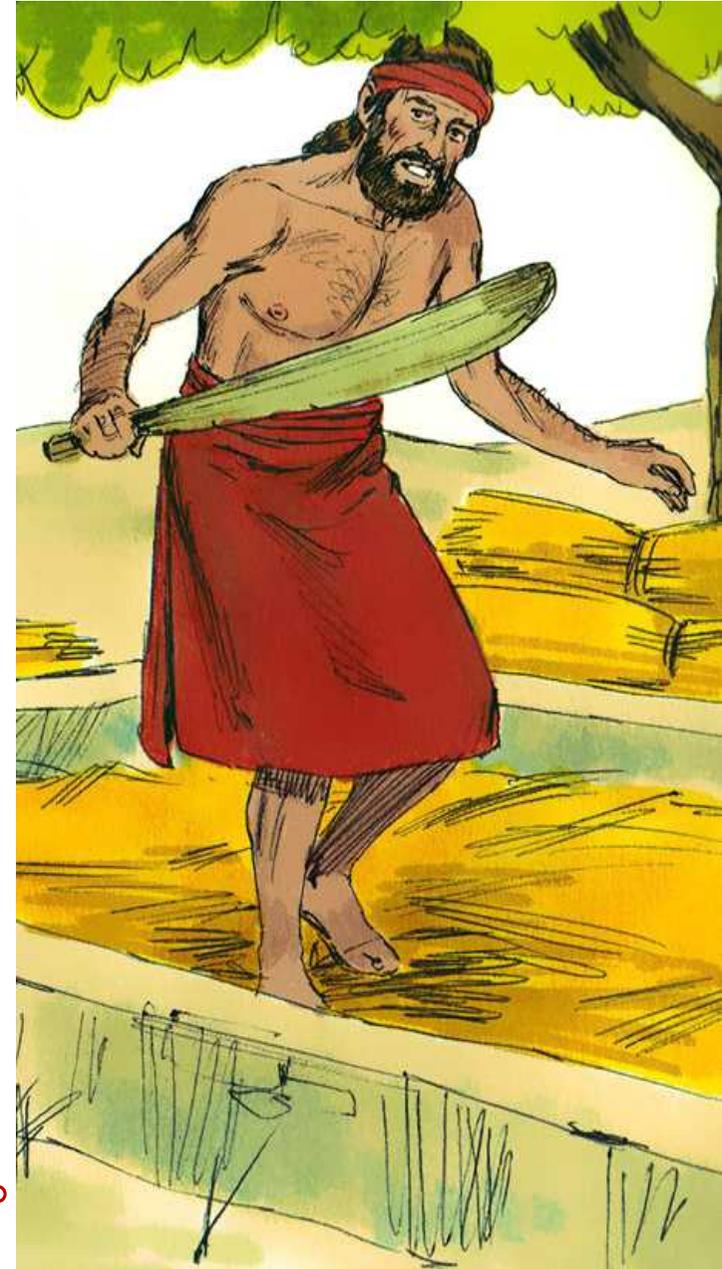
【ギデオン】 士師6:11～13

さて【主】の使いが来て、アビエゼル人ヨアシュに属するオフラにある櫛の木の下に座った。このとき、ヨアシュの子ギデオンは、ぶどうの踏み場で小麦を打っていた。ミディアン人から隠れるためであった。

【主】の使いが彼に現れて言った。「力ある勇士よ、【主】があなたとともにおられる。」

ギデオンは御使いに言った。「ああ、主よ。もし【主】が私たちとともにおられるなら、なぜこれらすべてのことが、私たちに起こったのですか。『【主】は私たちをエジプトから上らせたではないか』と言って、先祖が伝えたあの驚くべきみわざはみな、どこにあるのですか。今、【主】は私たちを捨てて、ミディアン人の手に渡されたのです。」

* 石造りの小さなプール。窪地に造られることが多い。



【一つ目のしるしを求めるギデオン】 士師6:14～18

すると、【主】は彼の方を向いて言われた。「行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか。」

ギデオンは言った。「ああ、主よ。どうすれば私はイスラエルを救えるでしょうか。ご存じのように、私の氏族はマナセの中で最も弱く、そして私は父の家で一番若いのです。」

【主】はギデオンに言われた。「わたしはあなたとともにいる。あなたは一人を討つようにミディアン人を討つ。」

すると、ギデオンは言った。「もし私がみこころにかなうのでしたら、私と話しておられるのがあなたであるというしるしを、私に見せてください。」

どうか、私が戻って来るまでここを離れないでください。贈り物を持って来て、御前に供えますので。」主は、「あなたが戻って来るまで、ここにいよう」と言われた。



【ギデオンのささげ物と一つ目のしるし】 士師6:19～21
ギデオンは行って、子やぎ一匹を調理し、粉一エパで種なしパンを作った。そして、その肉をかごに入れ、また肉汁を壺に入れ、櫛の木の下にいる方のところに持って来て差し出した。

神の使いは彼に言った。「肉と種なしパンを取って、この岩の上に置き、その肉汁を注げ。」そこで、ギデオンはそのようにした。【主】の使いは、手にしていた杖の先を伸ばして、肉と種なしパンに触れた。すると、火が岩から燃え上がって、肉と種なしパンを焼き尽くしてしまった。

【主】の使いは去って見えなくなった。

■シャカイナグローリーが、ささげ物を焼き尽くした。



【主の使いによる召命】 士師6:22～24

ギデオンには、この方が【主】の使いであったことが分かった。ギデオンは言った。「ああ、【神】、主よ。私は顔と顔を合わせて【主】の使いを見てしまいました。」

【主】は彼に言われた。「安心せよ。恐れるな。あなたは死なない。」

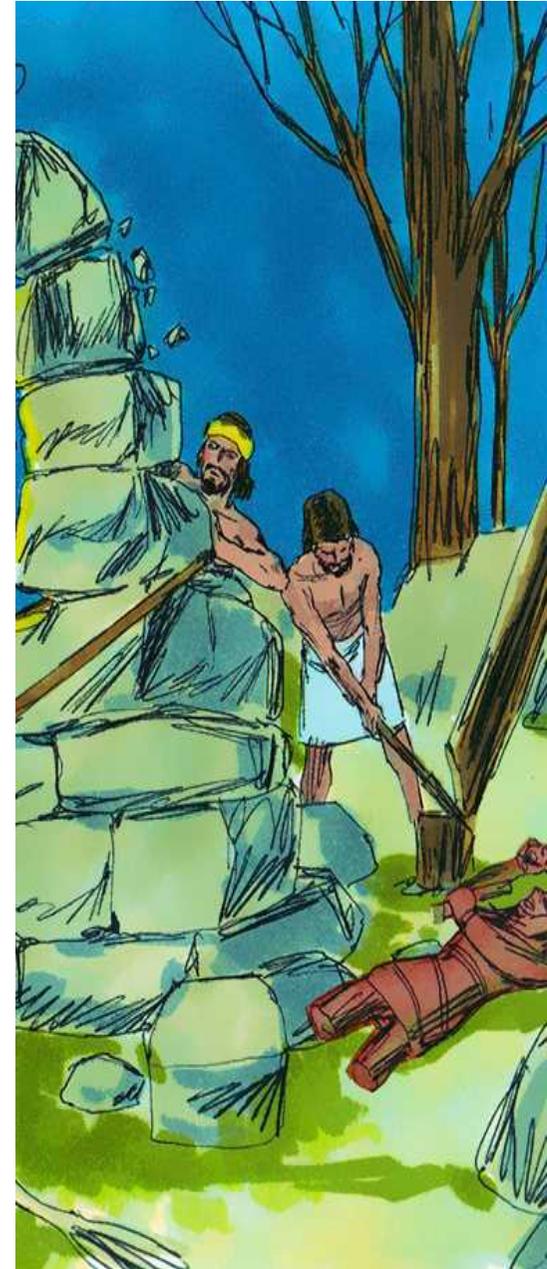
ギデオンはそこに【主】のために祭壇を築いて、これをアドナイ・シャロムと名づけた。これは今日まで、アビエゼル人のオフラに残っている。

- アブラハム、ヤコブ、モーセ、ヨシュアに現れた
主の使い(受肉前のメシア)*が、ギデオンに現れた。



【エルバアルと呼ばれて】 士師6:25～32

- ギデオンは、主に、父のバアルの祭壇を壊し、父の七歳の第二の雄牛(重要な牛)を献げるよう命じられた。
- 人々を恐れたギデオンは、しもべ10人と夜に実行。
- 翌朝、人々は、息子を殺せと父ヨアシュに迫った。
- ヨアシュは、バアルが神ならバアルが戦えばよいと人々に言い放った。➡信仰の回復が見られる。
- ギデオンは、「エルバアル(バアルは自分で戦えばよい・バアルと争う者)」と呼ばれるようになった。



【ミディアン人の侵略】 士師6:33～35

■ミディアン人が、東方の遊牧民を引き連れて、ヨルダン川を渡り、イスラエル平原*に陣取った。

* デボラの戦いでも舞台に!! ハルマゲドンでも!!!

■かつてない規模の侵略が行われようとしていた。

■「**主の霊がギデオンをおおった**」。笛を吹き鳴らすと、まず親族のアビエゼル人が集い従った。

■さらには、同族のマナセ族が集い、さらに、北方のアシエル族、ゼブルン族、ナフタリ族も合流した。



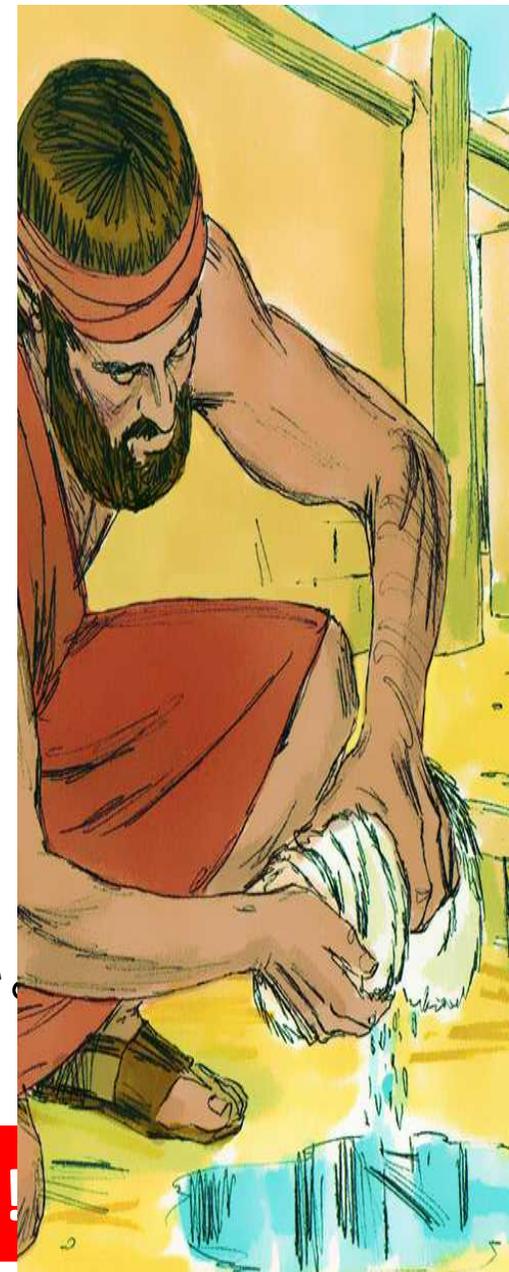
【第二、第三のしるし】 士師6:36～40

■ 戦いを目前に、ギデオンは、神が確かにイスラエルを救われることのしるしを求めた。

① 一匹分の羊の毛を麦打ち場(ぶどう踏み場?)に置く。
羊毛だけに露が降り、土全体が乾いていたら...。
➡ その通りになったが、なお、ギデオンは主に求めた。

② 逆に、羊の毛だけが乾き、地には露が降りたら...。
➡ これもその通りになった。もう言い逃れる余地はない。
★ これだけ、神様に注文を入れる聖徒も珍しい!! ★

臆病な私たちを忍耐強く導かれる主をこそ覚えよう!



Ⅱ. ミディアン人との戦い

士師記7章



【ギデオンの大軍を目前に】 士師7:1～3

- ギデオンの陣地から平原に広がるミディアン人の大軍の広大な陣営を見渡すことができただろう。
- しかし主は、ギデオンに、兵が多すぎると言われた。「イスラエルが『自分の手で自分を救った』と言って、わたしに向かって誇るといけない」
- ギデオンは、主に命じられた通り、恐れおののく者は帰れと告げた。2万2千人が返り、1万人が残った。
- 主の戦いは数ではない。私たちの霊的戦いも同じ。自分から喜んで主に従う者だけが奉仕をすればよい。



【神の選びの基準】 士師7:4～8

■主はなお、兵が多すぎるとギデオンに言われた。

■神による選別が、水場で行われた。

「犬がなめるように、舌で水をなめる者は残らず別にせよ。膝をつく者もすべてそうせよ。」

➡手ですくって飲んだ三百人だけが選ばれた。

■ここでの神の選びの基準は？？？

後にも先にも、こんな基準の選びはない!!

➡主は、300人のギデオンを選んだ。

すなわち、300人の臆病者たち。

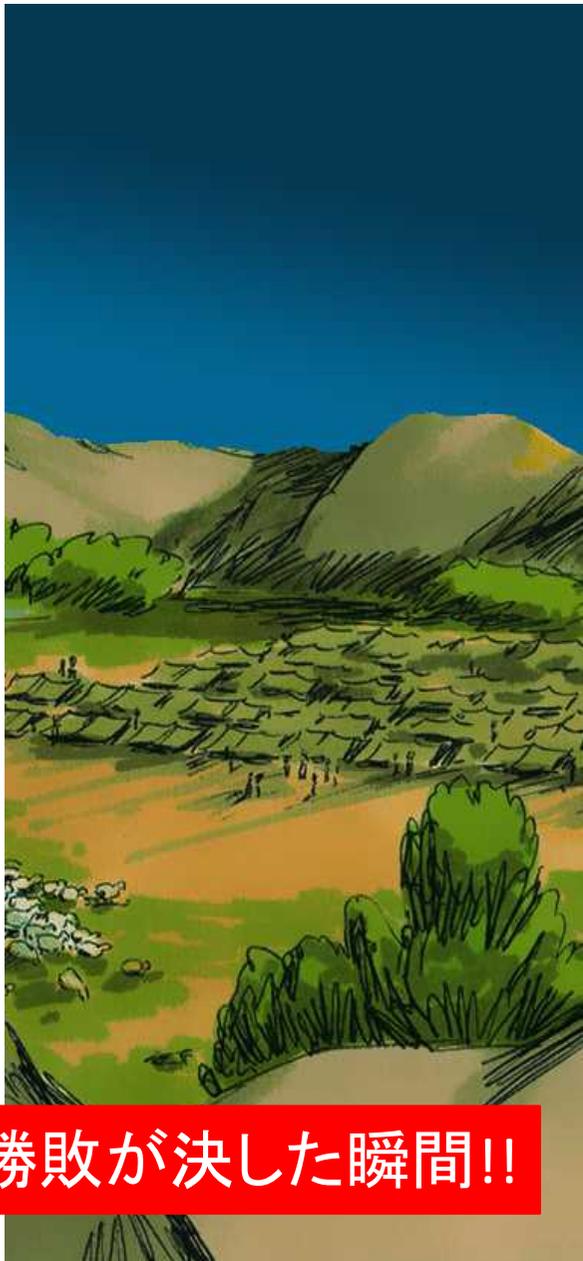
■この戦いでは、臆病であることが求められた!!

※局面ごとに、選ばれた士師の資質は違う!!



【ミディアン人たちの見た夢】 士師7:9～14

- 「もし、あなたが下って行くことを恐れるなら」と主は、恐れおののくギデオンに敵の偵察を命じられた。いなごの群れのような数え切れない大軍のもとへ。
- ギデオンは、敵が見た夢を話しているのを聞いた。「大麦のパンの塊が一つ、ミディアン人の陣営に転がって来て、天幕に至り、それを打ったので、それは崩れ落ちてひっくり返った。天幕は倒れてしまった。」
- 粗末な大麦パンが天幕を倒す夢は、ギデオン軍がミディアン人を打ち倒すことを現していた。
- 主の働きにより、敵の中に、恐怖が浸透していた。
→ギデオンは、敵陣の中で主を礼拝した!!



勝敗が決した瞬間!!

【ギデオン軍による主の戦い】 士師7:15～22

- ギデオンは、三百人を三隊に分け、全員に角笛と空の壺を持たせ、壺の中にたいまつを入れさせた。
- 隊は、陣営に近づき取り囲んだ。交代した見張りの兵が暗闇になれないうちに、行動を起こした。
- まずギデオン隊が角笛を吹き、全隊が続いた。壺をうち砕き、たいまつをかかげ、『【主】のため、ギデオンのため』と叫んだ。
- ギデオン軍に包囲され、奇襲されたと、敵はパニックに陥り、同士討ちを始めた。これも主の業だった。彼らは、ヨルダン川に向かって敗走した。

慎重さを求められる戦いでギデオン隊は真価を発揮した!!



【イスラエルの勝利】 士師7:23～25

- ナフタリ、アシェル、全マナセの軍が招集され、ミディアン人を追撃。エフライムも追加招集された。
- イスラエルは、ヨルダン川西岸を取り戻した。
- 今度は、ミディアン人が逃れ、隠れる番だった。敵の首長ゼエブは、ぶどうの踏み場に逃げ込んだところを見つかり、殺された。
- デボラが歌ったように、主は、逆転をもたらされる。主は、神に従う低き者を高く上げられ、神に背く高慢なものをひきずり下ろされる。



臆病者ギデオンだからこそ
際立つ神の逆転の勝利

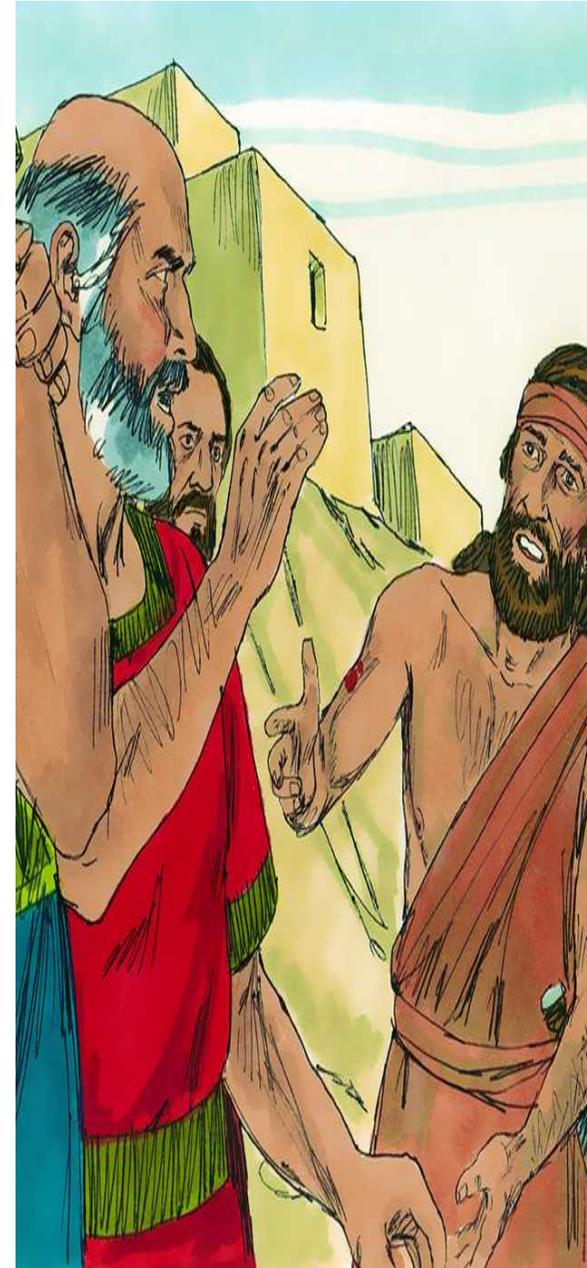
Ⅲ. 戦いの後に

士師記8章



【エフライムの嫉み】 士師8:1 ~3

- 追加招集され、緒戦に加われなかったエフライムは、ギデオンを激しく責めた。彼らの激しい気性は、慎重さを期す戦いには向いてなかっただろう。
- ギデオンは、緒戦よりも、追撃戦の方がはるかに分捕り物多かったことを指摘した。
- 敵軍の首長オレブとゼエブを討ったのもエフライムだった。最大の報償を手柄を、ギデオンは、ヤコブの長子の権を継ぐ名誉ある部族エフライムに譲った。
- 戦いに勝利したギデオンは、主に栄光を帰した。



【ギデオン軍の追跡】 士師8:4～12

■ ギデオンは、300人と共にヨルダン川を渡り追撃した。途中、ギデオンは、ヨルダン川東岸の同胞に食料支援を求めたが、断られた。

➡ 糧食が断たれれば、生死にかかわる。

■ 勝利も未確定な状況で、彼らは敵の復讐を恐れていたのだ。 ➡ 敵に加勢したも同然。

■ ギデオンは、拒否したスコテとペヌアルに、戦いの後、報いを返すことを宣言した。

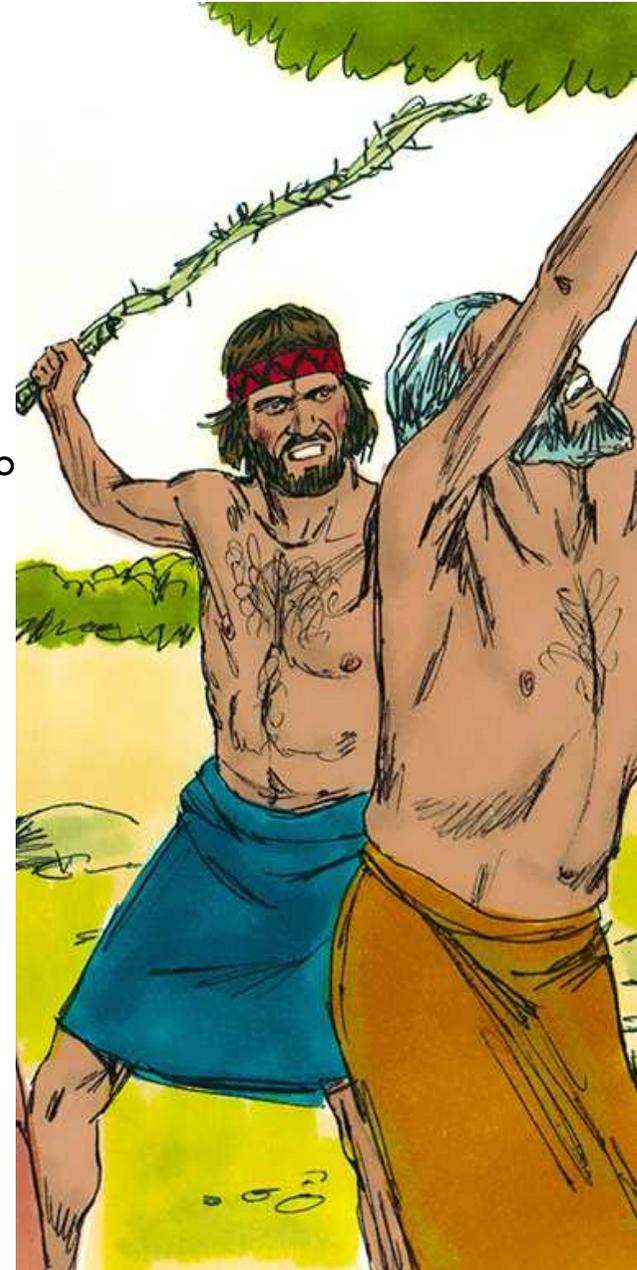
■ ミディアンの王ゼバブとツアルムナは、すでに12万の軍を失い、残りは1万5千だった。

■ 逃れ切ったと安心していただ敵を、ギデオンは300の兵で討ち、二人の王も捕らえた。



【裏切りの報い】 士師8:13～17

- 凱旋したギデオンは、宣言通り報いを返した。
- スコテの首長たちと77人の長老たち、町の責任者たちに、いばらやとげをもって懲らしめを与えた。
- ペヌエルのやぐらを打ち壊して、町の人々を殺した。やぐらは町の守りの中心。
 - ➡ ペヌエルの罪は、より重いものだったのだろう。
- 霊的戦いにおいても、最大の妨げは内側にある。
 - ➡ 自分の内に、地域教会の内に。
- ★ 主イエスを裏切ったのは弟子のユダ。
- ★ 使徒たちも、同様の裏切りに苦しんだ。
 - ➡ 彼らは不信仰者。もともと仲間ではなかった。



【ミディアン王の死】 士師8:18

- ゼバブとツアルムが、タボルにいたギデオンの母方の親族を虐殺したことが尋問で明らかになった。
- ギデオンは、若者に栄誉を与え、敵に屈辱を与えるため、長男エテルに処刑の執行を命じたが、恐れてできなかった。ギデオンの息子もまた臆病者だった。
- ギデオン自身が王たちを討ち、彼らのらくだにかけた三日月の金飾りをとった。
- ギデオンは、イスラエルの要請を断り、指導者になることはなかった。
- 討ち取った敵にイシュマエル人もいた。ギデオンは、彼らの飾りを集め、20kgもの金、豪華な織物でエポデを作り、故郷の町オフラに置いた。
- イスラエルは、やがてエポデをあがめるようになった。



【ギデオンの死】 士師8:28

国はギデオンの時代、四十年の間、穏やかであった。

■ ギデオンは大勢の妻を持ち、70人の息子を得た。

8:32 ヨアシュの子ギデオンは幸せな晩年を過ごして死に、アビエゼル人のオフラにある父ヨアシュの墓に葬られた。

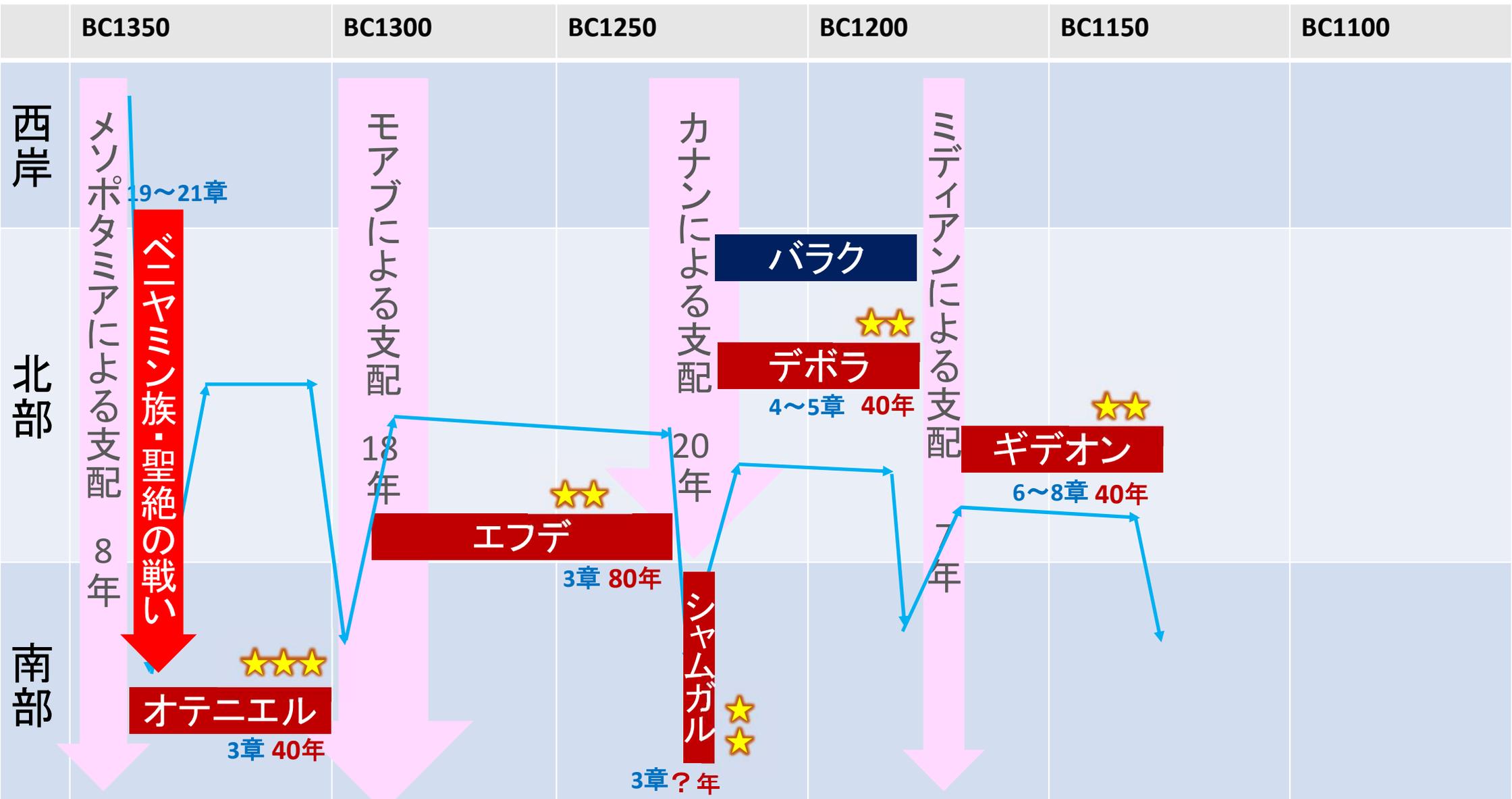
■ ギデオンの死後すぐに、イスラエルは元にもどった。

■ ギデオンの側女が生んだアビメレクが大罪を犯す。

8:34 イスラエルの子らは、周囲のすべての敵の手から救い出してくださった彼らの神、【主】を、心に留めなかった。



【士師の時代】



IV. まとめと適用

臆病者の神の勇士
ギデオンに学ぶこと



【臆病な士師ギデオン】

■ 敵を恐れ、隠れて麦を討っていたギデオン。神の召命を受けながら、3度もしるしを求めた。

■ 主が、臆病者のギデオンをあえて立たせ、用いられた。

ギデオン同様の臆病者300人が選ばれ、慎重を期す戦いに遣わされた。

■ 主に従い、信頼して御霊に満たされるなら、臆病さすらも益とされる。

■ 自分の弱さを思い知り、わきまえる者は、主にふさわしい。

すべての栄光は、主から来て、主に帰されることを知っているから。

【臆病な士師ギデオンに学ぶこと】

- ギデオンは、臆病ゆえに、主の御声によく聴き、よく従った。
主に信頼するか、拒絶するか、すべての人に求められる二者択一。
- 主を知り、神の恵みに預かりながら拒む者には厳しい報いがあるだろう。
ギデオンは臆病者だが、決して卑怯者ではなかった。
- ギデオンが示したのは、臆病を乗り越え、なお主にゆだねる勇氣。
誰にも言い逃れの余地はないと、臆病者の士師ギデオンに教えられる。
- すべてのクリスチャンは、神に召されて今がある。
答えるのか、拒むのか。選びは二つに一つしかない。
- 愛とは決断。愛するとは、決断していくことに他ならない。
→ 決断は、できないのではない。ただ、やらないだけなのだ。

臆病者でいい、
卑怯にはなるな

【臆病な士師ギデオンに重ねて思うこと】

- 怖がりな臆病で泣き虫だった自分がある。ケンカもろくにできない。ドッチボールは逃げ専門。かくれんぼは得意だったが...。アドバンテージがあるとしら、自分の弱さを思い知っていることくらい。
- 臆病者がいる。猛々しい者もいる。愚者も賢者もいる。しかし、主の前では、誰もが滅ぶべき罪人でしかない。
- ただ、主イエスの十字架の贖いと復活の福音を信じて救われたのなら、なすべきことは、一つしかない、主に従い、福音を告げつつ歩むこと。
- 新生し御霊を受けたのだから、もはや個人の資質など問題ではない。臆病は臆病なりに、主は助けて必ず用いてくださる。歩み続けよう。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

臆病者(おくびょうもの)のギデオンを、臆病者(おくびょうもの)のままに、

主は用(もち)いられました。聖霊(せいれい)が、わたしの内(うち)に

与(あた)えられています。言(い)い逃(のが)れるすべはありません。

ただ、主(しゅ)よ あなたを信頼(しんらい)し、あなたにすがります。

御心(みこころ)のままに この身(み)を用(もち)い、遣(つか)わしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」